

P9-269

腹腔鏡下手術の後片付けに関する実態調査 ～コスト削減をめざして～

伊達赤十字病院

○碓石 久

【はじめに】近年、腹腔鏡下手術は増加傾向にある。専用の鉗子類・手術器材は多種多様となり、術中操作から後片付けまで、看護師の役割は複雑化している。特に後片付けの長時間化は、身体的な負担となっている。後片付けに関する実態調査から、作業の見直しを実施しコスト削減をすることができたので、その対策と結果をここに報告する。

【研究目的・期間および対象】A) 後片付け時間の個人差を最小限とするB) 滅菌時における材料コストを削減するC) 期間：平成20年4月～平成21年1月D) 対象：当院手術室看護師11名

【研究方法】A) 後片付け時間の実態調査を施行B) 滅菌時におけるコストの実態調査

【結果】実態調査では、後片付け時間の平均97分に対して、最短50分、最長130分と、後片付けに個人差が存在する。作業手順を見直し、周知徹底することで、平均93分、最短86分、最長105分となった。平均は見直し前と大差は無いが、最短と最長の差がなくなり、個人差が改善された。コストについて実態調査を行い、滅菌パックの見直しを行った。術式で誤差は生じるが、滅菌パックを減らすことで、見直し前のコストから平均で約30%を削減することができた。

【考察】作業を見直すことが個人差を減らすことへつながり、コストの削減ができたと考える。さらに、実態調査の実施がスタッフのモチベーションを高め、後片付けをスムーズに行うことの重要性、コスト意識の必要性を再認識できたと考える。作業行程を統一したことは、洗浄レベルを一定にすることにもつながったと考える。

【終わりに】医療費が膨大化する昨今では、質の高い効率的な看護を提供する一方で、コストの削減に取り組むことも、患者に支持・信頼されるために欠かすことはできない。手術室看護師一人ひとりのコスト意識の積み重ねが重要であり、病院経営に必要であると感じている。

P9-270

体外衝撃波結石破砕術を受ける患者の不安の検討

日本赤十字社 長崎原爆病院 5階西病棟

○中村 彩恵子、坂井 利奈、松尾 真実

ESWLの利点は、無麻酔で開腹手術が不要なため侵襲が少なく治療が短時間でできるところにある。しかし、手術に関連した機器や未知の出来事に対する不安に加え、術中の流れを目の当たりにするとういう特徴がある。患者からは疼痛や治療に対する不安などの声も多く聞かれるが入院して間もなく治療を迎えるため術前の時間に限りがある。そこで、患者の不安内容とその程度を明らかにすることで有効な術前看護を短時間に提供できるのではないかと考え独自の質問用紙を作成し調査した。質問内容は6分類（身体的苦痛に対する不安・治療方法に対する不安・治療効果に対する不安・羞恥心に伴う不安・社会的不安・入院生活や医療者に対する不安）20項目を作成した。術後、入院当日（ESWL）を振り返ったアンケートを行い、さらに順序尺度を用い不安の程度を分析した。対象者は10代から70代の患者49名、うち男性39名、女性10名で、初回治療者が40名であった。結果、痛みとその持続時間に加えて、破砕回数・効果に対する不安も同様に高い事がわかった。身体的苦痛に対する不安、治療効果に対する不安について、社会的不安が高く、全体を通して、手術経験者の手術に対する不安は未経験者よりも低い結果となった。しかしながら、痛みに対する不安はたとえ手術経験があっても目立って高く、初回ESWLか否かにかかわらず身体的苦痛に対する不安には配慮が必要である。破砕効果によってはESWLが数回にわたる事もあり、完治までの期間が予測不能であることから、社会的立場や経済面での不安も多いと考えられ先を見据えた説明が必要である。これまで当病棟では術前後を中心にオリエンテーションを行ってきたが、やはりESWLの場面に対する不安が高く、術中の様子を上手く情報提供することやさらに不安の軽減につながると思われる。

P9-271

卒後3年目看護師対象シャドー研修を実施して 一手術看護を伝える工夫～

高松赤十字病院

○福家 里江

看護基礎教育時に手術室実習が行われなくなってきた現在、病棟に勤務する看護師は手術室での業務や看護がどのようなものかを知る機会が少ない。漠然と手術室は怖いところという印象があり、手術室へ勤務異動してきた看護師の中には適応できず早期に他病棟へ異動することもある。手術室での看護師の役割や業務を知ってもらい病棟看護との違いを少しでも分かってもらう必要があるのではないかと考えていた。本院看護部は、平成20年度から卒後3年目の看護師に特殊部門（手術室・腎センター・ICU・救急外来）のシャドー研修を企画した。私達は手術室で行っている看護を伝え、手術看護に興味を持ってもらうことを目的とし、研修内容を工夫し実施した。受け入れ側の環境を整えるために、手術室看護師には手術看護の楽しさややりがいアピールするよう周知した。研修では手術室看護師と共に術前訪問から各科手術に関わり、雰囲気や看護の実際、達成感を体験してもらった。その中で、どうしてその行為を行っているのか手術室看護師の視点で説明を加えた。研修後の反省会では、研修前に抱いていた手術室に対するイメージがどう変化したのか聞いた。その結果、研修に参加した看護師の約7割が、研修前は、手術室はどんな事をしているのか分からない、忙しそう、ビリピリして怖いなどとマイナスのイメージを抱いていた。研修後は、患者の安全・安楽に力を入れていること、医師や臨床工学技士との協働の重要性や、患者への声かけの大切さが分かったという意見があった。手術室看護師も自分達の行っている看護を言語化し、伝えることで自分の知識や看護を振り返ることができ、モチベーションを上げるよい機会となった。

P9-272

助産師による双胎の妊婦・褥婦の保健指導の意識調査

葛飾赤十字産院 4階病棟¹⁾、日本赤十字社助産師学校²⁾

○渡邊 美穂¹⁾、宮崎 あすか¹⁾、岩松 麻子¹⁾、
近藤 良子²⁾

【緒言】葛飾赤十字産院では、年間約90組の双胎分娩があり、妊娠褥、育児期の女性に個別の保健指導やツインクラス（双胎の妊娠褥、育児期に対する集団学習の会）を行い、個別の保健指導は全例、ツインクラスは70%の参加があった。しかし、対象からのニーズが高い状況にもかかわらずツインクラスに関わろうとするスタッフの減少が見られた。そこで、助産師の双胎の妊娠・褥婦に関する保健指導の問題点、対策を明らかにしたいと考えた。

【目的】当院における双胎保健指導の実態と問題点を明らかにする。
【方法】対象は当院の助産師・看護師で本調査に同意がえられた130名。データ収集期間は平成19年10月～2月。調査方法は自記式アンケート調査、質問項目は属性の他11項目を尋ねた。倫理的配慮は調査の趣旨、プライバシーの保護として無記名であること、本調査以外にこのデータは使用しないことを説明し、回収を持って同意を得られたこととした。

【結果】有効回答は92名（70.8%）であった。対象は1～25年目であり、1年目と3年目が最も多く各22名（22.2%）であった。双胎児の母と家族に関わったことがある者は88名（95.7%）であり、その中で「授乳方法」を指導する場面に関わった者が84人（95.5%）、双胎に関わる場面で不安があるのが「退院指導」の場面であり38名（43.1%）、不安に対する対処方法は先輩と同僚に相談している者が82名（92%）と多かった。ツインクラス担当を希望している者は40名（43.5%）であった。

【結論】対象者の多くは双胎の保健指導に関わっており、退院指導に不安を持っていた。不安の対処法は先輩に相談しているものがあった。今後は、対象者の声を反映させ、先輩からの伝承に頼るのではなく基本的な知識統一を図るため標準看護計画を作成していきたい。